

《鑑賞者の技法》と《鑑賞者の技法：痕跡》について

About Techniques of the Observer and Techniques of the Observer: Traces

水谷珠美(IAMAS修士1年)

MIZUTANI Tamami(IAMAS)

Archival Archotyping Projectに所属しています。《観賞者の技法》は、岐阜おおがきビエンナーレのテーマである、「メディア技術がもたらす公共圏」に応答するものとして私が企画し、チームで制作しました。内容は、あいちトリエンナーレの「表現の不自由展・その後」を実際に観ることができた観賞者に、私が感想をインタビューし、それを写真の和室（応接室）で座って聴くという作品です。

「表現の不自由展・その後」は、ご存知の方もいらっしゃると思いますが、あいちトリエンナーレのたくさんの展示の中のひとつでした。内容が色々取り沙汰され、この展示は一時閉鎖となりました。トリエンナーレの会期は75日間ありましたが、9日間しか展示されませんでした。このような事態が起きた背景はいろいろ考えられますが、先ず明らかにインターネットが無ければ、SNSでの炎上が無ければ、このような事態は起きなかった、と多くの人が口にしていました。ある意味では、「メディアテクノロジーがもたらした公共圏」とも言える場所であるSNSから、この一連の出来事が始まったということができると思います。この一連の象徴的な出来事を考える作品です。

加えて、私個人に関連してお話すると、この夏に中之条ビエンナーレ（群馬県）で作品を作成しまして、美術作品を見る習慣のない鑑賞者も想定される展示でした。また、私も観賞者として色々な各地のトリエンナーレやビエンナーレを見て回る機会もありました。そこで私が考えたことは、作品をゆっくり腰を落ち着けて鑑賞する、見るということが、いまでも難しいことになっているのではないかと感じることも多くありました。物理的に時間が無いということもあるのですが、作品というよくわからないものを時間をかけて見ることの難しさを考えました。ある種の忍耐力が必要で、なおかつ時間をかけて見たからわかるということでもない。日常生活では、スマートフォンでインターネットと繋がれば、わからないことがすぐに調べられる。すぐに情報が手に入ります。この生活習慣の中で、アートというよくわからないものに対して、じっくりと向き合いましょうと主張することは、困難

ではないか、ということも考えていました。

今回の展示の話に戻ると、《観賞者の技法》というタイトルは、ジョナサン・クレリーの『観察者の系譜』にちなんでつけました。この本は、見るという行為を一種の変数と捉え、見る行為は絶対普遍的なだけでなく、そのときどきで見る行為の意味や内容は変わるということを考えさせます。その見る行為の検証を、特に芸術作品の鑑賞行為、つまり観賞者側の見ることのあり方についての作品としました。写真のように、この机とヘッドフォンのセットが部屋の中に4つあり、インタビューのアーカイブズ自体は8つあります。ひとつの机につきひとつの音声を聞くことができます。

いらした方が必ず反応するのは、各音声が何分かということで、それを見ると「あ、長いですね」と結構驚かれます。短いもので20分、長いもので60分弱。これを全部聞くのは難しいですよねということをおっしゃられます。私自身もこれを全部聞くのは難しいだろうな、というところからスタートしています。ですが、この長さに意味があると考えていました。従って、全てを聞くことが難しいかもしれない、ということはお作品の中に意図的に置いたものであります。

最後の写真はギャラリー 2に設置したモニターです。和室のどの席の録音がどれだけの長さ聴かれているかをリアルタイムにデータビジュアライズしています。鑑賞者が何をどれだけ聴いているかの痕跡が、現場から離れた場所で現される、というわけです。画面の縦軸が4つの座席に、横軸が展示時刻に対応しています。各録音の長さの違いが各座席の幅の違いに反映されてもいます。画面中央が断層のずれのような描画であるのは、4つの席に8つの録音を振り分けるために展示時間の前半と後半で、各席で聴いて頂ける録音を切り替えているからです。全ての時間鑑賞されるわけではないという事は経験的にわかってはいたことですが、このように物理的事実として提示されることは作家にとっても興味深いものであると感じました。

